



留学生とのチームティーチングを通しての学び： 「英語演習III」、「英語科教育法II」

文学部 渡辺 敦子



神奈川県出身。国際基督教大学リベラルアーツ英語プログラムで20年間教鞭を取った後、2017年より文教大学文学部英米語英米文学科に赴任。Institute of Education, University of Londonより博士号取得。専門研究分野は英語教育、博士論文のテーマはリフレクティブ・プラクティス（ふり返し）による現職教師の成長。本学では英語教育学、英語科教育法等を担当。
(わたなべ あつこ)

文学部英米語英米文学科の授業3年生が履修する「英語演習III」（春学期開講）と「英語科教育法II」（秋学期開講）で実践している学生と留学生のチームティーチングについて紹介します。「英語演習III」の共通目的は「キャリアを意識し、英語力を高めること」で、私は Classroom English の授業を担当しています。チームティーチングの取り組みは相互の学びを通して上記コースを履修している学生、また留学生にとって大変意義深い活動であるようです。

1987年に開始されたJETプログラム後、英語母語話者（または非日本語母語話者）がALT（Assistant Language Teacher）として中学・高校の英語の授業に参加し、日本人教員（JTE）とのチームティーチングを行うのも見慣れた光景となってきました。また教員採用試験の2次試験でALTとのチームティーチングを課している自治体も増えてきました。さらに新学習指導要領導入後、英語の授業においてALTとのチームティーチングは大きな役割を担うことは想像に難くありません。しかしその一方、教職課程の授業でALTとのチームティーチングを扱う際、自分の英語に自信がない、またはJTEとALTとの教え方のよいモデルを知らないなどの理由からチームティーチングにあまり前向きではない学生も見受けられます。

言語的、社会文化的背景の異なる他者とチームティーチングを行うことは学生にとってよ

い学びの機会となるのではないかという考えから2017年度より「英語演習III」、「英語科教育法II」における模擬授業で学生と留学生のチームティーチングを実践しています。2017年度は英語母語話者である留学生にALT役を依頼しましたが、異言語、異文化的背景を持つ他者に自分の授業案を説明し、授業をすることが重要であること、また1人の留学生がALT役を20-30名の学生と共に行うのは時間的、体力的に困難なため2018年度からは非英語母語話者の留学生にもALT役を依頼しています。チームティーチングは次の通りに行われます。

模擬授業実践前の授業でALTとのチームティーチングをテーマとして扱います。留学生に授業に参加しALTの役を演じてもらい、JTE役を担当教員が担い、チームティーチングによる様々なアクティビティのデモンストレーションを行います。そしてチーム

ティーチング上で留意すること等をクラスで話し合います。また英語での教案の書き方を学びます。その後の授業で各学生と留学生によるチームティーチングが行われますが、「英語演習III」と「英語科教育法II」では少し異なった取り組みをしています。

「英語演習III」

英語演習IIIは週2回のコースで授業数が多いため、例年4回の模擬授業を予定しています。3回目の模擬授業に予定されているチームティーチングでは各履修者が、留学生に連絡し、アポを取り、英語の教案を作り、授業外で留学生と授業について相談をし、リハーサルをして授業を行い、授業でチームティーチングを行っています。留学生とのやりとりは全て英語で行うように指導しています。

「英語科教育法II」

英語科教育法IIでは教員採用試験の二次試験の対策も兼ねて授業中に行われる模擬授業の直前にALT役の留学生と相談後、チームティーチングをするという方法を取っています。模擬授業当日、各学生は自分と授業を行うALT役の留学生を告げられます。授業者はALT役の留学生と別室（予約をしておきます）で約15分間の相談時間内にレッスンプランの説明、ALT役に求めることを英語で説明し、授業が行われる教室に戻りチームティーチングを行います。当日のスケジュールとして次のような表を学生に配布しチームティーチングは行われます。相談の時間、チームティーチングの時間は履修者数により異なります。

	Preparation	Presentation	Demonstrators	ALTs
1 st presenter	13:10-13:30	13:30-13:38	文教花子(仮名)	Mary(仮名)
2 nd presenter	13:20-13:40	13:40-13:48	文教太郎(仮名)	Ken(仮名)
3 rd presenter	13:30-13:50	13:50-13:58	越谷花子(仮名)	George(仮名)

両授業で模擬授業は録画され、各学生はそれを視聴し、ふり返りを書くことが課題として与えられます。

2018年度に上記授業を履修している学生数名及び留学生のインタビューを行いました。学生からは「異文化を持つ学生とのやりとりに意味がある」、「英語の表現、授業の進め方など新しい視点を知ることができた」、「授業を一人で教えているわけではないので心強い」、

「教員ではなく留学生から英語を褒められたことが動機付けに繋がった」等の意見が聞けました。最後のコメントは、教員は学生を褒める、サポートするという立場である場合が多く、教員ではなく、同年代の他者から褒められたことが嬉しいということで、学習におけるピアの重要性を再認識しました。

留学生のインタビューからは「相互的な助け合い、協力から社会的なやりとり (social interaction) になった」、秋学期からチームティーチングに参加した留学生からは「日本人の学生と交流する機会があまりないのでこの試みを春学期から行ったほうがよい」という意見も出ました。

当初、この取り組みを考案した際は教職を履修している学生が異言語、異文化を持つ他者とやりとりをすることを目的としていました。そして留学生は文教大学に日本語を学びに来ているので、英語を使ってもらうことがよいのだろうかと少し心配しておりました。しかしこの取り組みは教職を履修している学生のみならず留学生にとっても意味のある活動であることがわかりました。英語を使い貢献することが文教大学という学習共同体の中で留学生の位置付けを正統的周辺参加 (legitimate peripheral participation) へと発展させたのではないかと思います。さらに学生同士が協同する場を教師が作り、与えることによりそこから学生同士の交流が生まれることもわかりました。学生主体で留学生の誕生日を祝おうとサプライズパーティー行われたり、学生同士でBBQを企画し、留学生を招いた事もあったようです。

私自身のふり返りとしては当初は教職課程履修生のためと思って始めた試みですが留学生にとっても有意義であり、本大学で1年間学ぶことを選んだ彼らの学びについてより積極的に考える必要があることを痛感しました。

